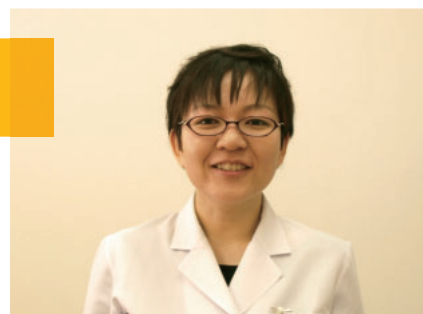


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第1回

株式会社ファーマシィ 山根暁子



私には、変わった肩書がある。「在宅専任薬剤師」だ。患者さんの家を訪ね、薬物療養を管理する。保険薬局で働きながら、仕事をするのは薬局の中より外のほうが多いのだから本当に変わった立場だと思う。在宅医療の重要性が取りざたされて久しいが、「専任薬剤師」はまだ全国でも少ないようだ。他社で在宅業務にかかわる薬剤師からは、よく「うらやましい」と言われる。彼らは通常業務の終わったあとの自分の時間を割いて在宅業務を行っているようだ。「患者さんに安全で効果的な薬物治療を」という使命感から、自主的ながんばりで業務を支えているのだろう。それにくらべると、私は恵まれていると感じる。

保険薬局薬剤師として働き始めて15年、在宅専任になって4年。患者さんの家では、即答できない質問や相談にもたくさんぶつかる。輸液ルートの接続手順であったり、患者さんの心の問題であったり、社会保障制度であったり、医科報酬についてだったり。また、なかなか玄関より奥に入れてもらえない家もある。薬の管理に問題がありそうなとき、管理場所を実際に見せていただけると解決法が見つかるケースもあるの



で、「どうやったら居間まで上がらせてもらえるか、どんな言いまわしなら患者さんの警戒心をほどけるか」と思案することもある。

薬局の中で築いたノウハウのデータベースだけでは、答えが見つからないことばかりだ。

「どうやったら患者さんの警戒心をほどけるか」へアドバイスをくださった先輩の言葉を、最近よく思い出す。

同行してもらい、自分の訪問時の対応を後ろから見てもらった感想として、「今日持ってきた薬は」と話し始めるのを止めてみたらどうか。代わりに「こんにちは。調子はどうですか」、そんな大きなオープンクエスチョンで始めたらどうだろうという助言だった。

薬局の窓口でその質問から始めると、むしろ心を閉ざされる患者さんが多い。「なぜそんなことをお前に言う必要がある、まずは薬を渡せ」といったところなのだろう。そのため、窓口では、まず患者さんがほしがっているものを渡し、次にこちらのほしいものというスタンスで接してきた。

だから、その点をすぐに切り替えるのは難しかった。だが最近、気がつく訪問時私の第一声は、「調子はどうですか」。対応を玄関先で終わりがたがる方も多いが、座り込んで話していただけることが徐々に増えてきた。

まだまだ何かをきわめたなどとは言える状況ではないが、最近、何かが自分の中で変わってきているのを実感する。患者さんの生活に根ざした信頼される薬剤師になるために、何が必要なのか。私の職場では、常にそれを自問自答させられる。